歳時記のある暮らし

二〇二一年《九月》

風に揺れるすすきや虫の声に爽秋の風情を感じるころとなりました。

皆様、おすこやかにお過ごしでしょうか。

いつも『神秘の健康力』をご愛用いただき、誠にありがとうございます。

残暑厳しい折ですが、空の高さや雲の様子に変化が現れ、時折吹く風に秋の気配を感じます。花々に仕組まれた時計は狂うことなく秋の花を咲かせます。稲穂が垂れるころ畦道を真っ赤な彼岸花やコスモスが彩る景色は、まさに日本の原風景です。

九月に入ると台風シーズンを迎え、農家の厄日とされる八朔や二百十日に並んで、九月十一日の二百二十日が訪れます。九月一日の「防災の日」を機に台風期に備えて避難場所や非常袋などを今一度、確認しましょう。たとえば停電時、スマートフォンの上に水を入れたペットボトルを乗せると灯りとして使えるなど、身近なもので急場をしのぐ情報なども集めておきたいものです。

九月七日からは白露(はくろ)。移動性高気圧に覆われて雲のない夜、放射冷却によって大気が冷えると空気中の水分が草花や木に朝露として現れます。「露が降りると晴れ」といわれ、朝露は爽快な一日の始まりを知らせてくれます。

旧暦の九月九日は重陽の節句。今の暦では十月中ごろにあたり菊の節句ともいわれます。起源は、他の節句の三月三日、七月七日などと同様に奇数が重なる日は古代中国では縁起のよい陽の日とされていました。重陽の節句では、長寿をもたらすとされる菊を飾り、菊酒を飲みました。

このごろの しぐれの雨に 菊の花 散りぞしぬべく あたらその香を

桓武天皇が、雨が降って菊が散ってしまうとその高貴な香りも消えて惜しいと詠んだ歌が歴史書『類聚国史(るいじゅこくし)』に残されているとされます。菊は奈良時代に中国から伝わり、今では「十六菩薩八重表菊(じゅうろくようやえおもてぎく)」が皇室の紋章やパスポートに使用されています。菊の調和のとれた形や高貴な香りが昔から貴族や皇室に愛されてきたのでしょうか。重陽の節句には菊花の香りを楽しみながら健康長寿を祈りましょう。

秋の月はかぎりなくめでたきものなり　　徒然草

(裏へ続きます)

春花秋月といわれるほど秋は月が美しい季節です。九月二十一日は中秋の名月。今年は満月も同じ日です。旧暦では七月、八月、九月を秋としており、その真ん中の日の八月十五日を「中秋」と呼んでいました。その中秋の夜にあがる月のことを「中秋の月」と呼びお月見をするならわしです。

お月見は平安時代、遣唐使によってもたらされ貴族の間で観月の宴が始まりました。電灯がなかった時代、日没後は真っ暗ですから満月の明るさは華やいだものであったでしょう。満月の夜の饗宴とは、何と優雅な時間だったのでしょう。この月見が農村の間で行われていた収穫祭と結びつき、豊かな実りの象徴として十五夜を愛で、月に祈りを捧げるようになりました。

太陽とともに身近な天体である月は、「新月、上弦の月、満月、下弦の月」という四つのサイクルで変化するため、昔の人にとってはカレンダーでもあり、「生まれて、育ち、満ちて、また次の命が生まれる」という生命の再生の象徴でもありました。日本には「月読尊（つくよみのみこと）」という神様や「月天（がってん）」という仏教の守護神がおられます。『竹取物語』では、かぐや姫は月の住人でしたが罪を犯したため地上に下ろされたといわれます。月は、地上よりも清らかな場所として捉えられていたのですね。

月を鑑賞するのにぴったりな季節ですが、宇宙は今、廃棄された人工衛星などの宇宙ゴミ問題や軍事競争で米国、中国、ロシアや新興国がしのぎを削る覇権争いの場へと変わりつつあるようです。月は夢とロマンの対象であってほしいと願いつつ、ススキやお団子を供え、虫の鳴き声や涼しい風を感じながら月を眺め、心まですっきり澄み渡る境地を楽しみたいですね。

秋分の九月二十三日ごろになると昼と夜の長さが同じになり、「暑さ寒さも彼岸まで」といわれるように、この日を境に日が短くなり秋の夜長に向かっていきます。暑い時期には遠ざかっていた趣味や運動、夏物の片付けや衣替えの準備、秋の計画を立てるなど、充実した日々を過ごしたいものです。

厳しい残暑は続きますが、秋雨前線が現れて天気のぐずつく日は肌寒くなることもあります。常に良好な体調を保ちお元気にお過ごしください。

皆様のご健康をお祈り申しあげます。

金氏高麗人参株式会社
おもてなし係お手紙担当　久郷直子